

# 姪っ子とのイケナイ一夜

## ～私のお、おまんこ……見てくださいい……～

鈴音

「はい、お兄さん。お茶を淹れてきました」

鈴音

「そんな……別に気を遣ってなんていないですよ。お兄さんに勉強を教えて頂いているんだから、これくらいさせてください」

鈴音

「今日も、よろしくお願いしますね。お兄さんも大学で忙しいところ、家庭教師をしてもらってるのは、心苦しいですけど……」

鈴音

「なんだか、ママの弟さんだからって、ワガママ聞いてもらっちゃってる感じで、申し訳ないです」

鈴音

「大変なようなら、ちゃんと言ってくださいね。ママ、強引なところあるし……はつきり言わないと、なし崩しにされちゃいますから」

鈴音

「えっ、私に勉強を教えるのが楽しい、って……ふふ、気休めでも、そう言ってもらえると嬉しいです」

鈴音

「では、よろしくお願いします、お兄さん」

鈴音

「最近の勉強……ですか。そうですね……特に詰まったりすることはないんですけど、来年は受験ですから……」

鈴音

「変に身構えちゃうって言うか……今から少し緊張しちゃってますね」

---

鈴音 「ふふ……まだ先の話なのに、今からこんな風  
じゃ、本当に受験になったら大変そうですね」

鈴音 「ええ、はい……だから、その……べ、勉強より……  
リラックスする時間が必要なんじゃないか  
なー、って今は思ってたー……」

鈴音 「あ、いえいえ！ お兄さんの教え方が悪いんじゃない  
んです。あくまでも、私がそう思っているだ  
け、って言うか……」

鈴音 「……えっと、その……。今日は、家に二人つきり  
ですね……」

鈴音 「べ、別に深い意味はないんです、けど……今日、  
えっと……パパとママ、帰ってこない、って言っ  
てました」

鈴音 「結婚記念日、らしいです。パパもママも相変わら  
ず仲が良くて、娘の私が恥ずかしくなっちゃうく  
らいですよ……」

鈴音 「お兄さんもそう思います？ ……ママは昔からそ  
んな人だった、って……ふふ、姉弟仲、良かった  
んですね」

鈴音 「私は兄弟がいらないから、そういうのちよっと羨ま  
しいです」

---

---

鈴音 「お兄さんは叔父さんですけど、本当にお兄さんがいたら、こんな風かな……と思うこともありますけど」

鈴音 「でも、えっと……本当の兄弟だったら……好きになったり出来なかったので、そこは嬉しいかな……」

鈴音 「あ、ええと……それで、ですね……。私ばかり話しててごめんなさい」

鈴音 「でも……うう……わ、私的にはっ……今日は、勉強よりも……リフレッシュする時間に、当てたいかなー、なんて……」

鈴音 「せ、せっかくパパもママもいないんですから……えっと、あう、うう……久しぶりに、お兄さんと……」

鈴音 「お兄さんと二人っきりの時間、ゆっくりと過ごしたい、です……」

鈴音 「あうう……あ、あんまり言わせないでください……私、今顔が真っ赤になっちゃってますよね……」

鈴音 「そ、そうですね……最近ずっと、出来てなかったからあ……お兄さんと、ぎゅーってしたり、したいって思っちゃってます……」

---

鈴音

「うう……私って、いやらしい子かなあ……お兄さんと二人つきりになった途端、こんなことばかり考えちゃうなんて……」

鈴音

「お、お兄さんも笑ってないでなんとか言ってくださいよお……いじわるう……」

鈴音

「もしかして、私が頑張っておねだりするところ見て、楽しんでるんじゃないですか……うー、ほんとに意地悪です……」

鈴音

「そ、それじゃあ……もっと、ちゃんとおねだり出来たら……」

鈴音

「私と、その……えっちなこと、してくれ………」

鈴音

「い、言いましたね……？ それじゃあ、お兄さんが我慢出来なくなるくらい、ゆーわくして……」

鈴音

「その気にさせて、いっぱいえっちして、もらっちゃいますからね……♪」

●トラック2

鈴音

「う、うう……ちゃんと、見ていてくださいね……」

鈴音

「はあ、う……自分から、こんなはしたない姿見せるの……初めてで……なんだかとてもドキドキしちゃってます……」

---

鈴音 「お兄さん、ごめんなさい……今日はお勉強を教  
てもらうはずだったのに、私……」

鈴音 「こんな、パンツ丸出しにしてえ……えっちな格  
好、しちゃってます……」

鈴音 「ふう、うふう……見られてる、って思う、だけ  
で……」

鈴音 「お股の間、きゅんきゅんしてきて……はああ……  
とっても、変な感じ、です……」

鈴音 「うー……私、本当に悪い子だあ……ママに内緒  
で、お兄さんに……こんなこと、しちゃってるだ  
なんて……」

鈴音 「ちゃんと、見ていてくださいね……私、お兄さん  
にえっちな気持ちになって欲しいって……すごく  
切なくなっちゃってるから……」

鈴音 「だから、こんなはしたないこと、出来るんですか  
らね……目を、逸らさないで欲しいです……」

鈴音 「うう……そんなこと言わなくても、お兄さん……  
じっくり私のあそこ……見ちゃってますね……」

鈴音 「も、もう……いいです、よね……？　これだけ見  
せたんですから、お兄さんも……えっちな気分  
に、なってますよね……？」

---

---

鈴音 「え……私がいつも、どんな風にしてるか見た  
い、って……」

鈴音 「あう、うううう……意地悪です、お兄さんの、い  
じわるう……」

鈴音 「ホント言うと、私も……もう、我慢出来なくなっ  
ちゃって……」

鈴音 「自分の指で、するのでもいいから……早く、気持  
ちよくなりたくなっちゃってます……」

鈴音 「私、いやらしい子なのかなあ……でもでもっ！  
こんなこと思うの、お兄さん相手にだけなんです  
からね……！」

鈴音 「えっとそのお……私が、自分でしてるの見て、お  
兄さんが興奮してくれるなら……」

鈴音 「私のえっちなところ、頑張って、見せてあげるか  
ら、ね……」

鈴音 「お兄さんにも、えっちな気持ちに、なって欲しい  
……です……」

鈴音 「はあ……はあ……頑張って、触る、からあ……  
ちゃんと見てて、くださいね……ん……んう……  
……」

鈴音 「ん、うう……やだっ、んっ、はっ……」

---

---

鈴音 「もう、お股……敏感になってます……ちょっと触っただけで、ビクってしちゃった……」

鈴音 「下着の、上から……なのに……軽く触った、だけなのに……んふうっ……声、出ちゃいます……」

鈴音 「ひゃうっ……ん……んあっ、んっ……くう……」

鈴音 「だめえ……どう、しょう……すっごく恥ずかしいのに、ドキドキするの、どんどん大きくなっています……」

鈴音 「いやあ……お兄さんの目、すっごいエッチになってるよお……私が、自分でするところ見て、興奮してくれてるんですね……」

鈴音 「え？ いえ……普段は、こんな風……じゃなくて……もっと、強く、って言うかあ……」

鈴音 「えっと、その……直接、触って……してます……」

鈴音 「は、はい……やっぱり、普段のやり方が、見たいですね……あうう……」

鈴音 「自分から、言った癖に……恥ずかしくて、恥ずかしくて……心臓が、爆発しちやいそう、です……」

---



鈴音 「えっと、その……っ、じゃあ……パンツ、下げ  
ちやい、ますね……」

鈴音 「ふう、ん……くうう……はあ、はあ……ああ、あ  
ううう……」

鈴音 「み、見せちゃったあ……自分で触って、おつゆ垂  
れてるお股……お兄さんに、見せちゃいました……  
…」

鈴音 「あうう……いじわる、言わないでください……い  
つもは、こんなにすぐ……おつゆいっぱい出たり  
とか、しないんですから……」

鈴音 「お兄さんに、見られてる、から……ちよっと触っ  
ただけで、こんなになっちゃってるんです……」

鈴音 「はあ……はあ……普段、は……ここ、丸出しにし  
てえ……入り口のそこ、触ってるんです……」

鈴音 「自分で、奥……触るのは、怖いから……入り口  
の、ビリビリするところ……指でスリスリしてま  
す……」

鈴音 「先っぽ、はあ……触ると、すぐダメになっちゃう  
から……怖くて、あんまり触れないです……」

鈴音 「……でも、お兄さんのこと考えてると……先っぽ  
切なくなつて……」

---

鈴音 「壊れちゃうくらいに、乱暴に……ぎゅーって、いじめちゃうんです……」

鈴音 「はあ、ん……くうんっ、んっ……今、も……入り口、触ってるだけじゃ、切なくてえ……」

鈴音 「お兄さんの目の前で……固くなってるクリ……」

鈴音 「ぎゅーって摘んで、痛いくらいに触りたくなっちゃってる、かも……です……」

鈴音 「はっ、はっ……ふああ、んっ、くう、あううんっ………！」

鈴音 「エッチなこと、言いながら触ってたらあ……まだ、軽くしてる、だけなのにつ……」

鈴音 「おつゆ溢れてえ……止まらなく、なって来ちゃいましたあ……」

鈴音 「いつも、こんなに出不い、出不いからあ……あうう……椅子まで、垂れて……お股の周り、すっごい、水たまりになっちゃってます……」

鈴音 「これ、気持ちいい、です……お兄さんに見られながら、自分で触るの……すっごい好き、かもお……」

---

---

鈴音

「もっと、見て、いいですから……私がお股いじつてるとこ、見て……お兄さんも、いっぱいいいっぱい興奮、してください……」

鈴音

「はああ……んあっ、はっ、あっ……！　くう、あうう……ひううんっ、んあっ、ああっ……！　お兄さん……お兄さあんっ……！」

鈴音

「あそこっ、すごい、ですっ……触るとこ、全部気持ちよくてっ……あああっ……んあっ、はあんっ！　あっ、あっ……はあんっ！」

鈴音

「私っ、もう……我慢、出来ないかもっ……お股、切なくてっ……これ、もう……我慢出来ないですっ……」

鈴音

「敏感な、とこっ……先っぽ……クリ、いじめちゃいますっ……」

鈴音

「ぎゅー、ぎゅーって摘んでえっ……おまんこドロドロにしてっ、イキなくなっちゃってますうっ！」

鈴音

「くひいん！　あっ、あっ！　見られてるっ、見られてる、のにいっ！　お兄さんの前でっ、私っ、エッチになるのっ、止まらないですっ！」

鈴音

「もっ、だめっ、頭っ、真っ白になっちゃいますっ、クリ気持ちよすぎてえっ、変になっちゃいますうっ！」

---

---

鈴音

「あっ、あっ！ 見られちゃってますっ！ 私のエ  
ッチなところ、いいですからっ、もっと見て、い  
いですからっ！」

鈴音

「お兄さんにつ、興奮してもらうからあっ、私っ、  
もっともっといやらしくなるからあっ！」

鈴音

「自分でおまんこ触って、イッちやうところ、お兄  
さんっ、見てくださいつ、見ててえっ……！」

鈴音

「ひうううっ！ んあっ、はっ、ああんっ！ 気持  
ちいいっ、やっ、あああっ、気持ちいいよおっ……  
…！ んあっ、あっ、ああああっ！」

鈴音

「恥ずかしいのにいつ、気持ちいいの止まらなく  
てっ、こんなの、私っ、ダメになっちゃうっ、く  
ふうっ、ふああっ、はっ、あああっ、ああ  
んっ！」

鈴音

「くひいんっ！ ダメダメダメっ、イッちやうっ、  
イッちやいますっ！」

鈴音

「私っ、見られながらイクっ！ オナニー見られな  
がらイッちやうっ、あああっ、こんなの、エッチ  
すぎだよおっ！」

鈴音

「お兄さんっ、ごめんなさいっ！ 私っ、イッちや  
いますっ、一人でイッちやいますっ！」

---

鈴音 「クリっ、イクっ、イツちゃうよおっ、お兄さんっ、お兄さんっ！」

鈴音 「ひゃうっ、あっ、はっ……はああっ、ああああんっ！」

鈴音 「ひぐっ、イクうううううっ、きやうっ、んあっ、イツちゃうううううっ！」

鈴音 「ひあっ、はっ……！ おまんこっ、イツちゃってますっ、あああっ、止まらないですっ……！」

鈴音 「イツてるのにつ、切なくて……指、止まらないっ……うううっ、恥ずかしいっ、恥ずかしい、ですっ……！」

鈴音 「あああ……はあ、んあ、はあ……くうう、んあああ……はあ、はあ……」

鈴音 「……私、イツちやい、ました……お兄さんの目の前で、自分で触ってえ……」

鈴音 「あんなに……声、出して……はしたなく、イツちやいました……」

鈴音 「うう、ううう……やだ……恥ずかしい……ホントに恥ずかしい、です……」

鈴音 「自分でも、こんなにいやらしい子だなんて、思ってたなかったよお……」

鈴音

「……ちゃんと、お兄さんも、興奮してくれました……？ お兄さんのために、頑張りましたから……」

鈴音

「あ……ズボン、すっごい膨らんでますね……」

鈴音

「え、えへへ……満足してもらえたなら、私も……頑張った甲斐、あったかな……？」

鈴音

「うん、お兄さん……苦しそうな顔……してますね」

鈴音

「その顔……とっても嬉しいです……私のオナニで、そこまで興奮してもらえて……」

鈴音

「ふふ、じゃあ次は……ちゃんとお兄さんのことも、気持ちよくしてあげます、ね……」

鈴音

「一緒に気持ちよくなりましょう、ね♪」

●トラック3

鈴音

「お兄さん……もっと、近くに来てください……」

鈴音

「おまんこばかり気持ちよくても、お兄さんにくっついてないと……私、ちよっと切ない、です……」

鈴音

「んんう……えへへ、お兄さんもすっかり興奮してくれましたね……抱きしめてくれて、嬉しいです……」

---

鈴音 「ふふ、おちんちん、大きくなってるの……はつきり分かつちやいます……苦しそう、ですね」

鈴音 「ん……このまま、しちやいます……？」

鈴音 「あ、ちょっと待ってください……ええと、最近、ネットで見たんですけど……」

鈴音 「男の人を喜ばせる方法で……ちょっと試してみたいかな、って……お兄さんさえ、よければですけど……」

鈴音 「……はいっ、私も、初めてなので不安ですけど、お兄さんの悦ぶことなら、色々してみたいから……」

鈴音 「頑張って、やってみますね。……じゃあ、身体を私に預けて、リラックスしてください、ね？」

鈴音 「ええ、とお……うう……恥ずかしい、けど……や、やつちやいます、からね……」

鈴音 「んちゅっ、ちゅっ……ん、ちゅう……」

鈴音 「んっ……くす、びっくりしちやいました？」

鈴音 「えっと、そのお……男の人って、耳が弱い、って……舐めてあげると、気持ちよくなる、って……見たんですけど……」

---

---

鈴音 「どうです……？ あ……嫌じゃ、なかったですか？」

鈴音 「よかったですか？ なら……もう少し……続けて、みますね……ん……はあ、ん……」

鈴音 「ちゅ、ん……れる、んうう……ちゅむ、ちゅ……はあ、んっ……ちゅうう、ちゅっ……」

鈴音 「ふふ……お兄さん、震えちゃってます、ね……そんなにこれ、いいですか……？ んんう……ちゅ、ん……れる、れるう……」

鈴音 「私、もお……お兄さんの味と、匂い……すっ……い、感じちゃって……」

鈴音 「んう、ふうう……恥ずかしいこと、してるはずなのに……これ、止まらない……です……ん、ちゅ……」

鈴音 「ちゅっ、ちゅっ……れる、ん……ちゅぶぶ……はむう、ん、ちゅううう……れる、れる……」

鈴音 「ぷあ、は……んむ、ああん、む……ちゅっ、んちゅう……じゅるるっ、んっ、ちゅうう……」

鈴音 「えへ……お兄さん、すっかり気持ちよさそうな顔しちゃってますね……私も、嬉しいです……」

鈴音 「んふふ……もっと、してあげますからね……」

---



---

鈴音

「ふう————」

鈴音

「きゃんっ……えへへ……びっくり、しちゃいました？」

鈴音

「舐めるだけ、じゃなくて……こうやって、ふーっとするのも……気持ちいい、ですよね……？」

鈴音

「ふーっ……ふっ……くす、ふーっ……」

鈴音

「えへへ、お兄さん、感じてくれてるみたいで、よかったです……すっごい気持ちよさそう……」

鈴音

「ん、きゃっ……お兄さんのあそこも、すっごい大きくなっちゃってます、ね……」

鈴音

「それじゃあ、えっと、あのお……このまま、おちんちんも……触ってあげちゃおうかな……？」

鈴音

「ふふっ、お兄さん嬉しそう……そんなに喜んでもらえるなら、私も嬉しいです……」

鈴音

「ズボン脱がせますから、ね。お兄さんはそのままでもいいです」

鈴音

「自分でやる、って……？ いいんです、私が脱がした方が、恋人らしいし……」

鈴音

「なんだかエッチ……ですよね♪」

---

---

鈴音 「はい、それじゃあ脱がせますから……少し、動かないでくださいね？」

鈴音 「……え、今の私、エッチですか……？」

鈴音 「うー……確かに、こういうの慣れてるの、エッチですけどお……」

鈴音 「お兄さんが好きだから、私……どんどんエッチになっちゃうんですよ……？」

鈴音 「えへへ……お兄さんのおちんちん、出てきました……」

鈴音 「もうガチガチに大きくなってえ……こんなに、興奮してくれましたね……」

鈴音 「くすっ……すっごく嬉しいです……」

鈴音 「お兄さあん……ん、ちゅ……ちゅっ……好き、です……大好き……んん、ちゅっ……」

鈴音 「はあ、ん……このままあ……おちんちんも、シコシコして……あげます、からね……」

鈴音 「はっ、んっ……すっごい、熱いです……固くて、立派でえ……」

鈴音 「んちゅっ、んっ……れる、じゅっ、ちゅうっ……じゅっ、ちゅっ……れるる……」

---

---

鈴音 「くすっ……お耳を舐めると、びくん、びくんって……動いちゃってます……」

鈴音 「お耳、やっぱり気持ちいいんです、ね……」

鈴音 「いっぱい舐めますから……お兄さんは、気持ちいいのだけ、味わっててくださいね……♪」

鈴音 「はあ、ん……ちゅっ、ちゅっ……れるるっ、んっ……あむう……」

鈴音 「中、もお……んんう……れる、あむうう……んじゅる、じゅううう……ちゅっ、ちゅるる……」

鈴音 「ちゅぶぶっ、ちゅっ、ちゅっ……んちゅううう……んっ……ぷあ、あはあ……」

鈴音 「えへへ……私の手、お兄さんのおつゆでビショビショになっちゃいました……」

鈴音 「初めて、やってみましたが……これ、本当に気持ちいいんですね……」

鈴音 「……え、おちんちん、もどかしい……ですか？」

鈴音 「ふふっ……やっぱりお兄さん、とってもエッチ……です……」

鈴音 「それじゃあ……いっっぱいお耳ぺろぺろしながらあ……」

---

---

鈴音 「おちんちん、ぎゅーってシコシコ……してあげますね……♪」

鈴音 「んっ、ちゅうづづっ……ふうっ、んっ、ちゆるるっ、んじゅっ、ちゅっ、ちゅっ……!」

鈴音 「はあ、んっ……れるっ、れるるっ、んちゅっ、ちゅっ……ちゅうづづっ、んちゆるっ!」

鈴音 「はっ、んっ……お兄さあんっ……ちゅっ、んちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、んちゅうづづっ!」

鈴音 「イツてっ、このまま、イツてくださいっ、んうっ、んっ、んむっ、んっ、んんんっ……!」

鈴音 「んんっ、んっ、んんうっ……くあっ、はっ、あああんっ!」

鈴音 「う、あ……出て、ます……おちんちん……びゅーびゅー射精してますう……」

鈴音 「はっ、はっ……手じゃ、抑えられない……んんう……すごい、量……」

鈴音 「くうんっ……はあ、はあ……手の中で、おちんちん動いてますう……どく、どくって……」

鈴音 「ああっ、はああ……す」、あっ……太ももに、かかってっ……んうっ……! 熱い、ですう……」

---

---

鈴音

「はああ……あつ、あつ……すいです、これえ……」

鈴音

「出してるの、見てるだけでえ……私まで、変になっちゃいそうですっ……くふう、ん、ふうう……」

鈴音

「はあ……はー……ん、く……まだ、びゆるびゆるって……奥から、こぼれてますね……」

鈴音

「えへ、えへへ……そんなに、お耳舐められながら、シコシコ……気持ちよかったですか……?」

鈴音

「私も、お兄さんのこと、すっごく近くに感じて、ドキドキして……」

鈴音

「イジってるだけ、だったのに……おまんこ……じゅん、ってしちゃいました……」

鈴音

「あう……あうう……お兄さん……私、もう……耐えられないですよお……」

鈴音

「自分でも、はしたないって……分かってるけど……もう、我慢……出来ないんです……」

鈴音

「次は、おまんこに……挿れて、ください……」

鈴音

「手、じゃなくて……私の中でえ……いっぱい、射精……してくれますか……?」

---

---

鈴音 「……ん、えへへ……ありがとうございます、お兄さん……」

鈴音 「エッチな彼女のおねだりに答えてくれて、本当に……大好き、です♪」

●トラック 4

鈴音 「きゃん、んっ……お兄さん……この格好のまま、しちやうんですか……？」

鈴音 「我慢、出来なくなっちゃたんですね……大丈夫……嬉しいから……」

鈴音 「大好きなお兄さんに、こんなに強く抱きしめてもらって、幸せ過ぎて……バチが当たっちゃいそうです……」

鈴音 「くす、勉強もしないで、エッチなことしちやってる悪い子なのに……ずるいですね、私」

鈴音 「あ、だ、だからってやめないでもいいですからね？」

鈴音 「うう……私、も……もう、我慢出来なくなっちゃって……すぐにでも、お兄さんと繋がりたいです……」

鈴音 「んっ、ちゅっ……はう、くうん……ちゅ、ちゅ……」

---

---

鈴音 「はあ、はあ……いきなり、キスするの……ずるい  
です……」

鈴音 「今でも、ちょっと我慢してるのに……そんなこと  
されたら、私……もっと悪い子になっちゃいます  
よお……」

鈴音 「はう、ん……ちゅ……ちゅっ……んん、んっ、ん  
ちゅっ……ちゅうう……」

鈴音 「私、お兄さんといると、どんどんエッチになって  
行っちゃってる気がします……」

鈴音 「嫌、ではないんですけど……お兄さんは、私がエ  
ッチでも……好きでいてくれますか……?」

鈴音 「……くす、そうですね。私のこと、こんなにし  
たのはお兄さんが悪いんですから……」

鈴音 「いっぱいいっぱい求めちゃっても、ちゃんと応え  
てくれます、よね……ふふ、嬉しいです……」

鈴音 「ん、くうん……おまんこ、もう……すっごい濡れ  
ちゃってますからあ……」

鈴音 「はあ……はあ……このまま、挿れちゃいます、ね  
……いいです……?」

鈴音 「ふふ、はい……お兄さんも我慢出来ないみたいで  
すし……失礼、しますね……」

---

---

鈴音

「くう、ん……ふう……んう、んゝゝゝっ……!」

鈴音

「お兄さんが、入って、来ます……はあ、はあ……」

鈴音

「お腹の中、開きながら……ああっ……! お兄さんと一つに、なっちゃいましたあ……」

鈴音

「んん、んっ……くふう、ふっ……はああ……」

鈴音

「ごめんな、さい……今、すっごくビリビリしててえ……はあんっ……」

鈴音

「挿れた、だけ……なのに……んっ……身体、動かない、です……」

鈴音

「んっ、んっ……でも……おちんちん入ったの、嬉しくてえ……それだけで、私……すっごい、幸せです……」

鈴音

「ふふっ……お兄さんも、嬉しそうな顔してます……やらしいこと、してるはずなのに……」

鈴音

「なんだか胸がポカポカしてきて……とっても、幸せになっちゃいますね、これ……」

鈴音

「あ、えっと……男の人は、挿れただけだと、苦しくないですか……?」

---



---

鈴音 「お預けされてるみたいで……おちんちん、辛かったりしませんか……？」

鈴音 「くすっ、気を遣ってくれなくても、いいんですよ。私は、お兄さんが喜んでくれれば、それが嬉しいから……」

鈴音 「はい、私は大丈夫です……お兄さんに、もっと喜んでもらえるように……腰、動かしちゃいますね……」

鈴音 「ん、はっ……くう、んっ……はあ、はあ……んああ……あっ……」

鈴音 「えへ、えへへ……いつもですけど、おちんちんで中触られると……ゾクゾクって、しちやいますう……」

鈴音 「ひあっ、はっ、あっ……ごめんなさい……えっと、あんまり強く、動けないで……」

鈴音 「お兄さんのおちんちんで、お腹の中いっぱい……これくらい動くので、精一杯で……」

鈴音 「で、でも大丈夫、ですから……」

鈴音 「お兄さんが我慢出来なかったら……好きなように、動いていいですからね……？」

---

---

鈴音 「……はい。私は、大丈夫だから……いっぱい、動いてください……♪」

鈴音 「……んあうっ……！ あっ、はっ……ああんっ、きやう、んっ、くっ……」

鈴音 「ごめんなさい、これ、よすぎてっ……ああっ……お兄さんっ、ぎゅってして、ください……」

鈴音 「ふあっ、あっ、はっ……あああっ……んう、くうう……！」

鈴音 「すっごい、奥まで入って……抱きついたら、余計に……奥に……」

鈴音 「ほんとこれ、ダメ、かもお……」

鈴音 「お兄さん……私、エッチになるの、止まらなくなっちゃいます、よおっ……はああっ、ああんっ……！」

鈴音 「ひうっ、んっ、ああっ、はっ……苦しい、の……私も……身体動いちゃうっ……」

鈴音 「おまんこの中、いっぱいなのにつ……もっと欲しいって、おねだりしちゃってますっ……」

鈴音 「ああっ、あっ、あっ……はあっ……お兄さんっ、お兄さんっ……突いて、もっと突いて、ください……」

---

---

鈴音 「ぎゅーって抱きしめながら、おまんこの、一番奥まで……いっぱい、突いてください……」

鈴音 「ひうつ、んっ……くううつ、はうつ……！ん  
あつ、あつ、あつ……んうつ、ひうつうつ……  
はっ、はっ……」

鈴音 「あつ、はあっ……ああんっ……んっ、んっ……お  
兄さんっ、お兄さん……好きい……くうんっ……  
……！」

鈴音 「んあっ……！くう、んふう……はあっ、はあっ  
……ふう、ふうう……んう、んっ……」

鈴音 「止めちゃ嫌、ですよお……はあ、はあ……もう、  
切なくなっちゃってますから……乱暴にしても、  
大丈夫ですよ……？」

鈴音 「……私の乱れてる姿、もっと見たい、って……？  
ううう……じっくり見られてると思うと……  
とっても、恥ずかしいです……」

鈴音 「あ、いや……いや、ですよお……急に止めないで  
ください……私……切ないのと、恥ずかしいので  
……」

鈴音 「頭、ぐちゃぐちゃになって……ほんとに、おかし  
くなっちゃいそうです……」

---

鈴音

「うー……お兄さん、エッチの時はいじわるしますよね……普段は、いっつも優しいのに……」

鈴音

「そ、そんないじわる、するなら……私の方から、やっちゃいますから、ね……はあぁっ……」

鈴音

「くうっ、んっ！ はあっ、あぁんっ！ はっ、はっ……ひあっ、はぁんっ！」

鈴音

「んっ、んっ……どう、ですか……これだけ、動けばあ……お兄さんも、いじわるなんて、出来ないですよっ……！」

鈴音

「もっともっと、激しくしますから……お兄さんも一緒に、私と一緒に、いっぱい感じて……くださいっ……！」

鈴音

「んあっ、あっ……はあっ、はぁんっ！ 好き、好きです……お兄さん、好きですっ……」

鈴音

「えっ、違いますっ……エッチが好きなんじゃなくてえ……お兄さんとうしてるのが、好きなんですっ……」

鈴音

「ふふっ、分かってくれますよね……お兄さんも、私だからこんなにおちんちん、おっきくなってるんですもんねっ……」

鈴音

「恋人になれて……いっぱいぎゅーって出来て、私、幸せです……」

---

鈴音 「いやらしい、かも知れないけどお……こうしてるの、本当に嬉しいんですっ……」

鈴音 「ずっとずっと、好きだったお兄さんとお……こ  
うやって繋がってるなんて、夢みたい、ですか  
らあ……」

鈴音 「遠慮なく、気持ちよくなって……好きなだけ、気  
持ちよくなって……いいんですからね……」

鈴音 「私の、おまんこでえ……いっぱいおちんちんしこ  
いて……せーし、びゅーって全部う……中に、く  
ださいい……♪」

鈴音 「きやうんっ、ひやあんっ♪ あっ、んっ……  
くあっ、はっ、あああっ、はあんっ……♪」

鈴音 「下から突くのっ、強くなってますう……いっぱ  
い、興奮してくれたんですねっ……」

鈴音 「ふふっ、いい、ですよ……私は、嬉しいですから  
……好きなだけ、動いてください……」

鈴音 「はあ……はあ……ひう、んっ、はあん……すっ  
い、これっ……ああんっ……」

鈴音 「奥、いっぱい叩かれてっ……あっ、はっ……気持  
ちいいの、どんどん大きくなります……これ、止  
まらないです……」

---

---

鈴音

「あうっ、あううっ、だめ、これ、止まらないっ、止まらないですっ、エッチな気持ちっ、止まらないですっ!」

鈴音

「いやっ、はっ……気持ちよくて……好き過ぎて……変になっちゃいますっ……私っ、変になっちゃいますっ……!」

鈴音

「んあ、あ……お兄さん、ごめん、なさいっ……んうう……ぎゅーってしてないと、怖い、怖いんです……!」

鈴音

「ほんとこれ、気持ちよすぎてえ……私が、壊れちゃいそうでえっ……お兄さんっ、お兄さあんっ……!」

鈴音

「ひあっ! あっ、はっ、ああんっ! くあっ、はっ、あっ、あああっ……! んくっ、んはあんっ!」

鈴音

「あっ、あっ、あっ、これ、だめっ、だめえっ、変になっちゃいますっ、あああっ、変になっちゃいますよおっ……ひうう、んいっ、ひいんっ!」

鈴音

「も、だめっ、イツちゃうっ、イツちゃいますっ、おまんこイクっ、おまんこイツちゃうんですうっ!」

---

---

鈴音

「おにいさっ、来て、来てえ……イッてるおまんこに、お兄さんの欲しいですっ、中につ、欲しいですっ……!」

鈴音

「一緒に、イッてくださいっ……おまんこ切ないからあっ! この中につ、全部くださいいっ……!」

鈴音

「……んあっ……も、ダメっ……」

鈴音

「イクっ……イクイクイクっ……ああああっ、イチャうよおおおっ!」

鈴音

「んやああああっ、あっ、はっ、ああああああんっ!」

鈴音

「いきゅっ……お、くうんっ……イッてっ、イッてますっ、あ、おおんっ、あひっ、くううう……!」

鈴音

「ひあ……はああ……へう、くううう……出て、出てましゅう……中に、たくさんっ、あああっ、はあああっ……!」

鈴音

「どーしよ……どーしよお……気持ちよくて、幸せでえ……お兄さんのこと、好きすぎて……」

鈴音

「イクのも、ドキドキするのも、全部とまんないよお……うううっ、これ、変ですっ……気持ちよすぎるからあっ……」

---

鈴音

「あああ……まだ、まだ出てるう……んあっ……！  
奥、当たって……はあんっ……イクの、止ま  
なくなっちゃうよお……」

鈴音

「ひぐっ、んっ、あっ……はああっ……はあんっ……  
……！ ふう、ふぐうう……ひあ、は、あ……  
はああ……はああ……」

鈴音

「あへ……んあ……はあ、んあああ……しゅ」……  
これえ……ほんと……すごくて……私……ううう  
……とっても、幸せえ……ですう……」

鈴音

「ふううう……ふあっ……はあ、くううう……  
はあ、はあ……ひいん……ん……はあ、はああ……  
……」

鈴音

「う、あうう……また、イッちゃいました……二回  
目、なのに……私、はしたなさすぎます……」

鈴音

「はあ……はあ……ん……ちゅっ、んむ……ちゅ、  
んっ……ちゅ、ちゅうう……」

鈴音

「ふう、あう……えへ、えへへ……お兄さんも、  
すっごいイッちゃったんですね……？」

鈴音

「あんなに、精液たくさん出してもらったのに、ま  
だまだこんなに求めてもらって……とっても、嬉  
しいです……ん、ちゅ……」



---

鈴音 「……あの、あのお……あの、ですね……私、えつと……」

鈴音 「まだ……収まりがつかないかも、ですう……お兄さんも、そうみたい、ですよね……？」

鈴音 「ううう、エッチなおねだりばかりして……本当に恥ずかしいですけどお……」

鈴音 「今度は、ベッドで……ちゃんと……いつものカッコで、おちんちん……挿れてくれますか……？」

鈴音 「あ、あのえっと！ やっぱり、ダメですよね……お兄さんも、疲れてますもんね……」

鈴音 「きゃんっ……！ お兄さん……？」

鈴音 「いや……そんな、抱っこなんてしないで、ください……いえ、違うんです……嫌では、ないんですけど……嬉しく、なりすぎちゃうから……」

鈴音 「んう……ううう、して、くれちゃうんですね……」

鈴音 「はい……ありがとうございます……えへへ、また私、甘えちゃった……」

鈴音 「こないけない子の私のおねがい聞いてくれて……お兄さんのこと、ホントのホントに、大好き、です……♪」

---

鈴音 「ん……ふふ、えへへ……こうやってお兄さんに見下されてると、緊張しちゃいますね……」

鈴音 「ぎゅーっしながらエッチするのも好きだけど、お兄さんからしてもらうのも、好きだから……」

鈴音 「……うう……我ながら、とってもエッチな女の子になっちゃいました……」

鈴音 「お兄さんのこと、好きで好きで、好きなこと、少しでも伝えたいから……」

鈴音 「私、いくらでもエッチになれちゃうんですよ……だから……」

鈴音 「お兄さんの好きなように、私の身体で……いっぱい気持ちよくなってください……♪」

鈴音 「はあ……はあ……こうして見ると、お兄さんの……とっても、大きいですね……」

鈴音 「うふふ……私の中に入ってたのなんて、嘘みたいですよ……」

鈴音 「いっぱいいっぱいエッチ、しちゃったから……私のおまんこ、この形になっちゃってるんですよね……」

---

鈴音 「そう思うと、お兄さんのおちんちん……とっても  
愛おいしい、です……」

鈴音 「ふふ……すっ……い大きくなっちゃって、苦しそう  
ですね……？」

鈴音 「私は、もう落ち着きましたから……中に、挿れて  
……」

鈴音 「すっきりしちゃって、いいですよ……？」

鈴音 「あんっ、きやうん……♪」

鈴音 「えへへ……私の入り口と、お兄さんが、キスし  
ちゃってる……みたいです……」

鈴音 「そのまま……いいですから……来てください……  
私の、中にい……」

鈴音 「ん、あ……はああ、んああ……あっ、あっ……来  
て、るう……おちんちん、来てます……くう、あ  
あんっ……！」

鈴音 「くすっ……これ、いつ見てもすごいです……私の  
おまんこ、食いしん坊みたいにお口開いちゃっ  
てます……」

鈴音 「隙間もないくらいに……ああんっ……おちんち  
ん、啞えちやってるう……」

---

---

鈴音 「はあ、はあっ……あああ……どんどん、入って来てますう……くううつ……！」

鈴音 「へあ、あはあ……先っぽが、中身に触るとお……んく……ビリビリして、これ……好きですう……」

鈴音 「んふうう……はっ、あっ……あああ……入って、来てます……奥に……どんどん、奥にい……」

鈴音 「んきゅっ！ くふっ、あっ、はああっ……当たって、ます……んうう……おちんちん、一番奥に、触っちゃってるっ……」

鈴音 「えへへ……んう……挿れるだけで、こんなに幸せになっちゃうだなんてえ……動かれたら、私……ホントにどうにかなっちゃうかもお……」

鈴音 「ん……お兄さんは、我慢なんてしないで、いいんですからね……？」

鈴音 「恋人との、エッチ……なんだから……いっぱい動いて、いっぱい好きって気持ちを、伝えてもらえると……」

鈴音 「私……とってもとっても、嬉しいです……っていうか、今もう……想像してるだけで、嬉しくなっちゃってます……」

---

---

鈴音

「おつゆう……あふれるほど、いっぱい出てるから……くす……お兄さんには、分かっちゃってますよね……」

鈴音

「はい……私は、大丈夫ですから……いっぱい、動いてください……お願い、します……」

鈴音

「あつ、んっ……はっ、はあんっ……やっぱりこれ、好きです……おちんちんで突かれるの、好きですう……」

鈴音

「どんどん、頭ふわふわしてきてえ……嬉しくて、幸せで……ちよつと怖いくらいかも、です……ふふ……」

鈴音

「本当に、お兄さんのこと好きになれて、よかったです……こんなに愛してもらえて、よかったです……」

鈴音

「はあっ、ああんっ……！ お兄さんも……同じ気持ち……ですか？ えへへ、嬉しいなあ……」

鈴音

「大好き、大好きです、お兄さん……」

鈴音

「私……こんなことでしか、好きな気持ち……伝えられないですけど……」

鈴音

「でも、だからあ……だから、いっぱいいい、私の身体で、気持ちよくなって欲しい、の……」

---

---

鈴音 「えへへえ……こいうの、ちょっと重い女、ですかね……んうっ……やだ、もお……」

鈴音 「私、困らせるようなこと言っちゃってるのに、お兄さん……どんどん強く、なってる……あうっ、んううっ……」

鈴音 「ほんとに、幸せ……大好きなお兄さんに、いっぱい愛してもらえて……幸せだよお……」

鈴音 「くあっ、あっ……はああっ、ああんっ！ お兄さんも、嬉しいのかなっ……どんどん、おちんちん強くなってますっ……」

鈴音 「はっ、あっ、ああっ、ああんっ……！ はい、私はっ、大丈夫です……」

鈴音 「っていうか……んうう……されればされるほど、どんどんおまんこ切なくなっ……強く、強くされたいって思っちゃってますっ……」

鈴音 「えへへ……お兄さんのエッチ、優しいから……私、いっつも少しずつ気持ちよくなって……」

鈴音 「いつの間にか、頭真っ白に、なるくらい……おまんこ感じさせられちゃいます、よお……」

鈴音 「んうっ、あうっ、んっ……はあ……お兄さん、も……いいんですよ……？」

---

---

鈴音 「好きなように動いて、私のおまんこ使ってえ……  
思いつ切り、気持ちよくなっても……」

鈴音 「はあ……はあ……はい、全然、ヘーキですから……  
…好きなように、乱暴でもいいから……私の身体  
で、気持ちよくなって、ください……!」

鈴音 「……はい、大丈夫ですから……来て、ください……  
…♪」

鈴音 「あっ、あっ……はあああっ……ああんっ、くうう  
んっ……!」

鈴音 「くうんっ……んあっ! はああっ、ああっ、はあ  
んっ! あっ、あっ、あっ、あああんっ!」

鈴音 「だ、だいじょぶ、ですっ……気持ちよすぎてっ、  
声、止まらない、だけ、ああっ、ですからっ……  
…」

鈴音 「優しくされるだけじゃ、恋人じゃっ……んうっ、  
ないですよねっ……お兄さんのおちんちん、いっ  
ぱい、気持ちよくさせてあげたい、ですっ……  
……!」

鈴音 「だからっ……はあ、んあっ……このまま、続けて  
ください……!」

鈴音 「いっぱいいっぱい、私のおまんこ使ってっ……気  
持ちよくなって、欲しいですうっ……!」

---

---

鈴音

「くうっ、おにいさっ……ひあっ、ああっ！んくっ、もっとっ、へーきですからっ、ひあっ、んあっ、ふううっ、くうううっ！」

鈴音

「もっとっ、くらさいっ……私もっ、あああっ、私もおっ、これ、しゅきですからっ、気持ちいいですからっ、欲しいですからあっ！」

鈴音

「んひっ、んっ、あっ……はああっ、あっ、はあんっ……んあ……くうう……！」

鈴音

「お兄さん、とっても気持ちよさそう、ですっ……えへへ、嬉しい……もっともっと、おまんこ使っていいですからね……」

鈴音

「私のちっちゃいまんこ、いっぱいいっぱい愛して……気持ちよくなってえ……好きなだけ、射精してください……！」

鈴音

「射精されるの、好きっ、ですから……お兄さんの射精好きっ……おまんこの奥にっ、ビュービュー出されるの、あれ、ほんとに好きなのっ……！」

鈴音

「だから強く、欲しいっ……強く求めて、欲しいんですっ……お兄さんっ……あううっ……お兄さんっ……！」

鈴音

「んっ、くっ……ちゅむっ、んじゅっ……んじゅっ、ちゅっ、ちゅうううっ……んじゅるっ、んじゅっ、ちゅっ、んちゅうううっ……！」

---



---

鈴音

「はあっ、あむっ……んむっ、ちゅっ、ちゅっ……んううっ、んぢゅっ、ちゅうっ……!」

鈴音

「へあ、はあっ……好き、好きだよ……くつつきながら、いっぱいエッチされるの、すごい……ぽーとしちゃう……ひあ、は……」

鈴音

「欲しい、です……このまま……真っ白になったまま……おまんこに射精されて……すごいおっきくイッちゃいたい……!」

鈴音

「エッチな女の子でっ、ごめんなさい……だけどっ、お兄さん好き、お兄さんとエッチするの好きすぎるからあっ……!」

鈴音

「他の全部忘れちゃうくらいっ、一緒に気持ちよくなるっ……精液っ、全部中に出していいからあっ……!」

鈴音

「もうっ、おまんこイッちやいますからあっ! 中に、中に出してくださいっ!」

鈴音

「ふあっ、あっ、はっ、はっ……ああんっ、ひああっ……お兄さんも、来るんですねっ、イッちゃうんですねっ!」

鈴音

「嬉しいっ、嬉しいですよっ! 一緒にイこっ、一緒にイッてくださいっ!」

---

---

鈴音 「おまんこに射精してっ、イッちゃってくださ  
いっ、来てっ、来てえっ……………」

鈴音 「んいっ、んあっ、あっ、あっ、はあああっ、ん  
あっ、ああああっ、イクっ、イッちやいますっ、  
あああっ、きやうううううっ！」

鈴音 「ひやうっ、んあっ！ くううううううっ！ ん  
ひっ、ひあっ、あっ、ああああああっ！」

鈴音 「あっ、あっ、ああああっ！ イクっ、イクイクイ  
クっ！ きやうんっ、いっ、ひっ、イッちやうよ  
おおおっ！」

鈴音 「ふ、いっ…………くうう、うあっ、ああっ、はああっ  
…………おまんこイクっ、中出しでイキますっ！」

鈴音 「いっぱいもらいながらっ、私っ、イッてますっ、  
イッてますうううっ！」

鈴音 「ああ…………あっ、あ…………はあ、あああん…………お兄さ  
ん…………うくうう…………しゆき、あう、ううん…………」

鈴音 「中に、くれて…………私、もう…………飛んじやって……  
あああ…………好き、好き好き好き…………好きときも  
ちいーしか、考えりやれないでしゆ…………」

---

鈴音

「んう、おっ、くうん……精液っ、もっと、もっと欲しいですう……おまんこの中全部、精液でいっぱいにして欲しいですっ……くう、ううんっ……!」

鈴音

「はーっ……はーっ……ダメ、射精とまんないっ……イクのも止まんないですっ、私これっ、どーにかなっちゃいそっ……へう、うううんっ……!」

鈴音

「お兄さん……あ、あ……お兄さん……好き、好き……!」

鈴音

「こんなに、こんなに……飛んじゃうくらい、愛してくれてえ……嬉しくて、気持ちよくて……ううう……!」

鈴音

「ほんとにこれ……もう、私……幸せすぎて……どうにかなっちゃいそうです……お兄、さん……!」

鈴音

「はーっ……う、くうん……ううう……ふうん……はっ、はっ……はあ、はあ……!」

鈴音

「ふう、んふう……ひあっ……はっ……はあ……んふう、ふうう……!」

鈴音

「……えへへ、お兄さん……すっごく、幸せそうな顔です……!」

鈴音

「私も今……おんなじくらい、幸せで、気持ちよさそうな顔、してるのかな……えへへ……!」

「いっぱい、いっぱい……私のこと幸せにしてくれて、ありがとうございます……心から、愛しています……♪」

●トラック6

「ふう……ふう……うふう……私、またやっちゃいました……」

「お兄さんが優しいからって、エッチしてくれるからって、はしたないお願いばかりしてしまってた……」

「……いえ、お兄さんが気にしなくても、私が気にするんですよ」

「今日だって本当は家庭教師の時間だったはずなのに、エッチしてたら、もうこんな時間だし……」

「そもそもお……女の子なのに、こんなにエッチだなんて、普通と比べたらおかしくありません？」

「なんだか私、甘え過ぎちゃってます……」

「あ、いえっ！ 別にお兄さんがお願い聞いてくれるのが、悪いとか……そう言いたい訳じゃないんですけど……」

「ん、あうっ……お、お兄さん……？ 急に、抱きついて……どうしたんですか……」

鈴音

鈴音

鈴音

鈴音

鈴音

鈴音

鈴音

鈴音

鈴音

---

鈴音 「あ、いえ……嫌じゃないです……やっぱり、こう  
してると……私、とっても安心します……」

鈴音 「お兄さんも、そうなんですか？」

鈴音 「えへへ……そうだったら、ちょっと嬉しいです」

鈴音 「……私からも、抱きついちゃって……いいです  
か？」

鈴音 「んふふ……ありがとう」ざいます……じゃあ……  
ぎゅー……」

鈴音 「私、もっともっと頑張ります……勉強もそうです  
けど、いろんな、他のこととか……」

鈴音 「だってずっと、お兄さんの恋人でいたいですから  
……」

鈴音 「えっとまた……私がエッチな私になっちゃった  
ら、ちゃんと注意してくださいね……？」

鈴音 「でも、たまには……またこうやって、いっぱい愛  
してくれると、嬉しいです……」

鈴音 「……うー、やっぱりまた、私わがまま言ってる……  
……」

---

---

鈴音

「エッチなことだけじゃなくて、他のことも……  
ちゃんと大人にならないといけませんね、私……」

鈴音

「胸は育たない方がいい、って……？ むう、  
もー！ なんでそんなこと言うんですかっ！」

鈴音

「……頑張って育たない方法、探しておきます……」

---